編集後記

今号は外国語学部英語英文学科の石黒敏明教授の退職記念号である。神奈川大学、外国語学部、そして言語研究センターの発展に計り知れない貢献をされた石黒教授に心から謝意を表す。そして、その記念号にふさわしい論文や研究ノートが今号に並んだことを大変に嬉しく思う。原稿を投稿された先生方、そして本誌の作成にご尽力された言語研究センターのスタッフに深く感謝したい。

さて、私にも人並みに趣味がいくつかあるが、なかでも旅行は海外・国内問わず大好きで、金銭的・体力的、そして時間的に許される限り家族で出掛けることが多い。その際にどこに行っても非常に強く感じるのは、英語というのはまさに現代におけるリンガ・フランカ、すなわち国際語であるということである。

タイ、インドネシア、台湾、北欧、ポルトガル。最近私が訪れたなかで英語が第一言語ではない国々だが、どこに行っても私は大きな声で英語を使う。その際、相手が私の英語がわからなくて四苦八苦するなどと言う状況にはほとんど直面したことがない。なかでも北欧やポルトガルなどの欧州では驚くほど流暢な英語が返ってきて、東海岸はボストン仕込みの（笑）私の英語も本気を出す。するとあちらからネイティブと遜色ない素晴らしい英語がまた飛んでくる、といった具合である。

こう書くと、「それに比べて我が日本では英語もまともに通じない、、、」などという嘆き節が続くのかとお思いかもしれないが、私の訪れる国内の観光地ではどこでも、なかなかどうして、英語や外国語をうまく使って激増するインバウンドで商機を掴んでいるように見える。

東京からほど近い温泉地・箱根は奈良時代に開湯したとされる。東海道の整備とともに江戸時代には温泉地の横綱としてすでに不動の地位を築いており、廣重の「箱根七湯図会」にも既にその盛況ぶりが描かれている。そんな箱根の温泉は私の大のお気に入りだが、いつ行ってもとにかく外国の方が多い。有名なお店や温泉はもちろんだが、一見鄙びたような温泉宿にも慣れた感じの外国の方が多くて驚く。そして、いわゆる欧米の方はもちろんであるが、アジアの方も大抵は英語でお店や宿の方と意思疎通をする。お店や宿の日本人も多少たどたどしい場合が少なくはないが、英語を使ったり、英語のメニューを用いたりしてなかなか堂々とコミュニケー

ションしている。

冬の芦ノ湖畔。ある大きなお店のすぐ外で、スペースを借りているのだろうか、旬の見事な苺を並べて販売されている年配の女性がいらした。得も言われぬ深紅の艶に覆われた大粒の苺を一目見て気に入り、一パック買って帰ることにしたが、やはり同じように考えたのだろう、二組が私の前で会計待ちの列を作っている。ふと見ると今会計しているのは欧米の方のようだ。するとその女性はにこやかに英語で客と会話している。その欧米の客も嬉しそうである。さて、次の客つまり私の前の客の順番になったのだが、今度はどうも中国の方のようだ。すると、なんとその女性がこんどは中国語を使って会話し始めた。やはりにこやかに会話され、そして客も大層満足の様子だった。さて、私の番になったので私は日本語で尋ねてみた。「すごいですね、英語も中国語も話せるのですね。」「まあ、なんとなくね。箱根あたりだと最低でも英語、できれば中国語の簡単な会話ができないと商売にならないんですよ。」とにこやかに答えてくださった。

「日本人はなぜ英語が下手なのか」「アジア最低レベルの日本人の英語」という揶揄などどこ吹く風と、日本でも英語を始めとする外国語が物凄いスピードで浸透中である。本学で学ぶ学生たちは卒業後、様々な分野の現場に飛び込むのであろうが、どの現場に行っても外国や外国語との関わりがないところなど今やほとんどない。学生のうちから、海外にそして日本中に出掛けて行き、自らの眼で世界を見てもらいたい。テレビやネットやマスコミを通して見えるものとはかなり違う世界がそこには待っていて、そしてそれはほとんどの学生の皆さんが考えるより、ずっとずっと素晴らしく、眩いばかりの光を放つものである。

と、こんな私の愚見にも、おそらく石黒先生はにこやかに頷いてくださるのではないかと思う。（岩畑）